

“ひと”と“いきもの”の距離感

今年の夏、農村の実家で、私にとっては驚異的な体験をした。ひる間、床に何か動くものがあり、つい踏みそうになって思わず「ヒエ〜」と声を上げた。長さ15cm程度の太いムカデだった。しかし、80歳を越える母親は実に冷静だった。すぐに「ガスを付けて」と指示し、箸でひょいと持ち上げ、さっと焼いて、窓から庭に放り投げた。そのうち野良猫がぐわえていってくれるのだという。その素早い冷静沈着な対応には恐れ入った。ちなみに箸も割り箸でないダメなのだという。武器も周到に準備されていたのだ。ひとのエリアを防備する方法を知恵として蓄積していたのであり、そういう知恵は私の世代にはもう無い(私だけかもしれないが……)。

ところで、市内にある我が家では、毛並みから「モカ」と「ラテ」という2匹の猫を飼っている。「撫でて」と言わんばかりに、お腹を出してひと前で無理やり寝そべってくる姿は実に愛くるしい。多少の悪さをして「憎めないな」で済んでしまう。こういう動物のことを「ペット」と呼んできたが、そういうひとの所有物のニュアンスがある呼称よりは、最近は人生の伴侶としての動物という意味で「コンパニオンアニマル」と称する場合もあるという。“ひと”と“いきもの”の距離感は、時代とともに動いているのだ。

他方、ひとは、自分らの為に何らかの役に立つ動物のことを「家畜」と称してきた。なかには、家畜をペット化しているひともいるようだが、ひとの感じ方次第である。このひとと家畜の距離感を変えるべき時代がきていることを痛感させられたイベントが、この7月にあったので紹介しておこう。

「人も動物も、満たされて生きる。」をスローガンにしたアニマルウェルフェアに関するシンポジウムが、日本獣医生命科学大学にて開催された。主催は、AWFC・JAPAN(アニマル・ウェルフェア・フード・コミュニティ・ジャパン)である。アニマルウェルフェアの考え方は、ヨーロッパではかなり浸透していると聞くと、日本でもようやくそれに対応する組織が活動し始めている。AWFCのリーフレットによれば、その考え方は以下のようなものである。

アニマルウェルフェアは一般的には「家畜福祉」と訳されているが、語源的にはWel(人間も動物も満たされて)+fare(生きている)とのことであり、その方が意味は分かりやすい。アニマルウェルフェア畜産は、これまでの生産性・効率性を追求してきた工業的畜産システムからの転換をめざす。その原則は、次の「五つの自由(Five Freedoms)」に依拠している。①飢えと渇きからの自由(健康と活力の為に必要な新鮮な水と飼料の給与)、②不快からの自由(畜舎や快適な休息場などの適切な飼育環境の整備)、③痛み、傷、病気からの自由(予防あるいは救急診療および救急処置)、④正常行動発現の自由(十分な空間、適切な施設、同種の仲間の存在)、⑤恐怖や悲しみからの自由(心理的な苦しみを避ける飼育環境の確保および適切な待遇)。

つまり家畜が最終的な死を迎えるまでの飼育過程において、ストレス・苦痛から自由で、健康的な生活ができる状態をつくることである。例えば、ケージ飼いの養鶏、豚の去勢はその原則に反するものとされ、と殺の仕方も、極力恐怖を与えない方法でなければならない。これらは、現在の日本人の感覚からはほど遠いものかもしれない。生産者のなかには、去勢の無い養豚など考えられないという意見もあった。しかし、ヨーロッパを中心に国際的な動きとなっているのは事実である。消費者や家畜にとってメリットがあるだけでなく、生産者にとっても成功の可能性を広げる。ヨーロッパでは、アニマルウェルフェア(AW)認証機関も複数あり、商品差別化の重要な戦略になっているのだ。

AWFCの協働事業のひとつに、「AW商品の供給チェーンシステムを畜産経営者、食品企業者、流通業者、外食業者、消費者と協働して開発」することを掲げている。これからの畜産経営の競争力は、このようなチェーンとしての競争力が重要になるとシンポジウムでは指摘されていた。その競争力の源泉がAWなのである。日本に限らずアジアではAWへの対応が遅れているが、そういうなかでもヨーロッパと畜産関係の貿易が多い東南アジアが比較的進んでいるという。日本では、東京五輪に向かってGAPの推進が騒がれているが、その次にくるのはこのAWの波であろう。世界動物保健機関(OIE)は世界家畜福祉基準を策定しつつあり、日本も早急に体制を整えるべきである。

(富山大学 教授 酒井富夫・さかい とみお)